

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ
Quarterly magazine FOYER
2023 summer

つながる、ひろがる、あつまる
ほわいえ

017

FOYER



日常に、劇場を。



 熊本県立劇場
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】
公益財団法人 熊本県立劇場
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】
株式会社 ジャム
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ 2023 summer 発行日:2023.6.20 ※掲載内容は5.31現在のものです。

social inclusion

社会包摂とは、社会的に弱い立場にある人を取りこぼさない、社会全体で支え合う考え方です。劇場にこの社会包摂機能を提唱する動きは、2012年の「劇場、音楽堂等の事業の活性化に関する法律（通称、劇場法）」施行後から広がりをみせています。本来は劇場という場は社会包摂機能が求められ、ヨーロッパでは古くから劇場、美術館など、文化芸術に誰もかふれられる機能を有していました。劇場法によって明文化されたことにより、日本においても社会包摂機能が少しずつではありますが、注目されつつあります。文化芸術は、誰もが享受できる社会全体の利益であ

り、劇場は文化芸術活動を通して社会参加の機会を開く役割を担っています。といっても何も難しいことはありません。「文化芸術はみんなで楽しむのだよ」というメッセージを伝えることが劇場の役割なのです。熊本県立劇場は、劇場法が制定される前から「みんなで楽しむ」文化芸術の事業に取り組んできました。1993年から2001年まで不定期で実施していた「こころコンサート」は、県下の地域ごとに障がいのあるなしに関わらず集まって、一年間の音楽の練習の成果を発表するステージとして公演が企画されました。単なる発表の場ではなく、一年

間、障がいのある人、ない人がいっしょに練習を重ねていく時間を「心を通わす時間」として事業の一部に取り込んだことが特徴です。当時は全国でも初の画期的な取り組みとして紹介されました。その後、知的・発達障がいがある人たちによる音楽活動を推進する「NPO法人オハイエくまもと」に、県立劇場は携わっています。オハイエくまもとの活動の発表の場である「とっておきの音楽祭」は、街中で開催される音楽のイベントとして定着。今年5月21日には14回目の音楽祭が開催され、多くの人々が音楽という文化芸術を楽しむ姿が見られました。

全国に先駆けて取り組んできた、社会包摂の考えをもとにした事業

「文化芸術は誰のもの？」
その問いに対する答えは、おそらく人それぞれにあるのではないのでしょうか。文化芸術は社会との関わり、人と人との関わり、時代との関わり、さまざまな「関わり」から生まれるものです。「文化芸術を創造し、享受し、文化的な環境の中で生きる喜びを見いだすことは、人々の変わらない願いである」。
2001年に策定された文化芸術振興基本法（現文化芸術基本法）の前文の冒頭にあるように、文化芸術は生きる喜びにつながり、心のつながりを分かち合う
社会で生きる人たちにとって価値のあるもの。誰か特定の人のものではなく、すべての人にとって価値のあるものが文化芸術なのです。
今回のほわいえの特集では、熊本県立劇場が「すべての人のもとへ文化芸術を届けたい」という、社会包摂の考えのもとに取り組んできた事業についてご紹介します。



Special feature 県立劇場が取り組む「社会包摂」事業

近づく、飛び込む、歩み寄る。

文化芸術をすべての人のもとへ。

県立劇場が取り組む社会包摂事業

◆こころコンサート(1993年～2003年)

障がいのある人も、ない人も、いっしょになって、一年間準備・練習期間を明け、ゴールである舞台に向かう事業。こころを通わず時間を経ることを、事業の主軸として企画。全国でも初の試みとして注目された。



◆演奏家派遣アウトリーチ(2004年～)

地理的に劇場から離れている地域に向けて、プロの演奏家を派遣する事業。スタート時は福祉施設、高齢者施設にも訪れていたが、現在は教育委員会と連携し、熊本市外の小中学校を中心に演奏家派遣を行っている。



◆オハイエくまもと協力事業(2011年～)

音楽の力で心のバリアフリーを目指す「オハイエくまもと」の理念に賛同し、設立当初から関わり続けている。



熊本市現代美術館

◆アートキャラバンくまもと(2016年～)

こころの復興支援事業として、熊本地震後にはじまった。演奏家の生の演奏を聴いたり体験する機会を、避難所や学校などに届けるプロジェクト。災害にかかわらず、今後は文化芸術を広める事業として取り組んでいく予定。



◆劇場って楽しい!!(2019年～)

知的・発達障がい児者を対象とした劇場体験プログラム。専門家の協力を得て、障がいの特性を知り、プログラムの運営方法など、県劇の職員が研修を重ねて開催している自主事業。2019年の初回以降、年々参加者が増加しており、2022年度公演のアンケートでは「この体験(鑑賞)をきっかけに、地域(まち)の劇場、ホール、映画館に行こうと思いませんか?」という設問に対し、72%が「思う」と回答。多くの参加者にとって、本事業が新たな体験へのきっかけにつながる様子が見られた。今後は鑑賞だけでなく表現する方向にもつなげられるような幅広いプログラムを展開予定。今年7月には、障がいのある方も一緒に参加できるダンスワークショップを企画し、障がいの有無に関わらず、日常的に文化芸術に触れ、表現できる機会を設ける。



アートキャラバンくまもと#38 佐渡裕指揮スーパーキッズオーケストラ(2016年7月29日)

熊本地震をきっかけに 県立劇場の文化芸術の使命を再確認する

文化芸術の持つ力が再認識される契機となったのが、2011年の東日本大震災からの復興の過程でした。さらに遡って、災害における文化芸術が与えるこころの復興の重要性は、1995年の阪神淡路大震災によって多くの人に「実感」として得られることになりました。阪神淡路大震災がきっかけとなり、前述した2001年の「文化芸術復興基本法」策定につながります。文化芸術にふれることで、被災した人が日常を少しずつ取り戻し、音楽に勇気づけられ、演劇が希望を取り戻す力になる。生きるために必要な社会的インフラ機能を文化芸術は持っているのです。

そして、2016年の熊本地震。熊本県立劇場の職員たちが被災し、震災の当事者になったことで、大きなターニングポイントとなりました。震災以前から続けてきた「演奏家派遣アウトリーチ事業」をはじめとする活動の意義をあらためて実感することになったのです。劇場の建物が被害を受け、しばらく臨時休館することになり、劇場に人を迎え入れることができなくなった県劇のもとに、熊本での支援活動を希望するアーティストからの相談が相次ぎ

ました。そこでにはじまったのが「アートキャラバンくまもと」です。アーティストと被災者をつなげるこの事業は、行き先選びなど慎重さが求められる場面もありましたが、こころの復興として文化芸術が必要とされることを再確認することができました。地震後の県立劇場の再開を祝った「県劇夏祭り」は、このアートキャラバン事業の一環として、県立劇場を舞台に開催しました。当日は多くの方が集まり賑やかさを取り戻した劇場は、まさにこころの復興を象徴するものでした。翌年からは「県劇盆踊り」にタイトルを変更して実施、途中コロナ禍で中断しましたが、今年2023年8月15日にパワーアップして再開します。アートキャラバン事業は災害に限らず、必要とされるところに劇場が向かい、文化芸術をお届けする事業として、今後も継続していきたいと考えています。

誰かのもとに劇場から近づいて、時には飛び込んでいき、そして歩み寄る。特別なものではないけれど、特定の誰かのものではない、すべての人のための文化芸術を、これからはいろんな形で届けていきたいと思っています。



県劇盆踊り(2018年8月14日)

Highlight

ホワイエサロンコンサート Vol.5
清原晏
箏リサイタル
助演／細川 喬弘(箏)、山上 聖宗(ピアノ)

2023年5月13日(土)
コンサートホールホワイエ

雨に濡れる新緑を背景に、
みずみずしい
箏の音が響くひととき。

コンサートホールのホワイエを活用した事業として1年前にはじまった「ホワイエサロンコンサート」。5回目を飾ったのは、熊本と東京の2拠点で活動する箏奏者、清原晏(はる)さんの初のリサイタルでした。

清原さんは昨年開催された「くまもと全国邦楽コンクール」で最優秀賞を受賞。県在住、出身者として初めての受賞となる快挙を遂げました。今回のホワイエサロンコンサートでは、東京藝術大学時代の同期である箏奏者の細川喬弘さん、平成音楽大学在学中のピアノ奏者の山上聖宗さんを共演者として迎え、箏曲をはじめ、アニメでお馴染みの曲など、全6曲を披露しました。新緑が萌える窓の外は、時おり激しく雨が降る一幕もあり、自他共に認める「雨男」の清原



さんが奏するみずみずしい箏の音に呼応しているようでもありました。

「小さい頃から親しみのある県劇のホワイエが会場になるのは不思議でしたが、音の響きもホールに近いものがあり、緑を背景にした素敵な空間で演奏できたことは格別でした。今後の演奏活動では、邦楽が盛んな熊本の文化を全国にアピールしていきたいと思っています」とコメントしてくれました。



【県劇盆踊り】

とき：8月15日(火)午後5時00分～
ところ：県立劇場演劇ホールホワイエほか
ゲスト：あべや、牛深ハイヤ保存会、中山芳保会
■ゲームコーナー…スーパーボールすくい、輪投げ、射的などなど
■飲食ブース(計画中)

再開します！ 県劇盆踊り

コロナ禍前まで実施していた「県劇盆踊り」が帰ってきます。県劇の演劇ホールホワイエに檜(やぐら)を組み、新感覚邦楽エンターテインメント集団「あべや」の迫力の生演奏で盆踊りを楽しむ企画です。館内での実施のため、雨が降っても大丈夫！涼しい館内で、盆踊りやハイヤを踊るもよし、見るもよし。参加は無料です。ぜひ浴衣でお越しください。
会場には、飲食ブースを開設するほか、輪投げや射的などなど、お子様が楽しめるゲームコーナーも。
姜尚中館長はじめ劇場スタッフ一同、皆さまのお越しをお待ちしています。

Highlight

アウトリーチ事業を担う 演奏家を募集します

県立劇場では、小中学校や福祉施設などへ演奏家を派遣し、音楽の出前授業を実施する「演奏家派遣アウトリーチ事業」を実施しています。本事業を担う演奏家を募集いたします。

◆応募条件

【対象】九州在住または熊本県出身で演奏活動を行っている演奏家

【部門】①声楽 ②ピアノ ③弦楽器

④管楽器 ⑤打楽器 ⑥邦楽器

【年齢】2024年4月1日現在で、満18歳以上40歳まで

【条件】

※電子楽器は対象外とします。
※持ち運びが可能な楽器(ピアノを除く)であること。

※研修(2024年1月および2月を予定)に参加できること。

※アウトリーチ実施会場(県内の小中学校等)に自家用車等で移動できること。

※2次選考合格者は4人以内を予定しています。

◆選考方法・日程

「1次選考」参加申込書ならびに音源による書類審査
締切/2023年8月31日(木)必着

※結果は9月中旬までに文書で通知。
「2次選考」1次選考合格者を対象としたオーディション

日時/2023年11月9日(木)
会場/県立劇場 第1練習室(予定)

◆応募方法

応募者は、6ヶ月以内に録音した音源をDropboxまたはYouTube(限定公開)にアップロードし、所定の方法でご提出ください。

募集の詳細・申込フォームはこちらのQRコードから



2021・2022年度 登録アーティスト 小路永 和奈さん(箏奏者)

県立劇場のアウトリーチ事業のことは以前から知っていて興味がありました。機会があればチャレンジしたいと思っていたところ、2021年度からの募集で邦楽器が初めて加わったのですぐに応募しました。アウトリーチ事業で出前授業を提供するのは、小学生から中学3年生までの幅広い子どもたちです。授業の中で、曲の組み立て、構成を考えた上で、それぞれの年齢に合わせて「なにを」「どう」伝えていくのか、伝え方を工夫することが求められ、そこが苦労した点であり、同時に楽しい点でもありました。子どもたちの反応はとも素直で、生の箏演奏を聴いてもらう機会が私にとってもとても貴重な体験になりました。授業を受けた子たちの一人でも「箏をはじめたい」と思ってくれたらとてもうれしいです。アウトリーチ事業を経験したことで、自分自身の演奏会でも伝え方を意識するようになり、とても良い刺激になっています。



ユリコバレエスタジオ

バレエ芸術を、
もっと身近な存在へ

バレエは人の身体が魅せる芸術。身を削ってつくった美しいラインと、体幹が整った身体の動きで表現する、ダンサーの身体そのものが芸術といえるものです。

菊池郡菊陽町にあるバレエ教室「ユリコバレエスタジオ」は、スタジオ設立から30年間、これまで多くのプロダンサーを輩出し、現在も海外のバレエ団で活躍している卒業生や海外の学校にバレエ留学中の生徒がいるといます。在籍している生徒は80名。健康のため、体力をつけるための大人バレエクラスも開いています。スタジオ主宰の田上由里子先生は、「バレエのレッスンは姿勢を整え、筋肉をつけ、さらに頭をかなり使い、集中力を養います。集中力がつけば、時間の使い方が上手になります。教室に通っていた子の中には、プロのダンサーになる子もいれば、別の夢を叶えるために海外の大学院に進学する子もいます」と語ります。受験を理由にバレエをやめていく生徒をこ



田上 由里子
[たのうえ ゆりこ]
ユリコバレエスタジオ

ユリコバレエスタジオ
30周年記念公演

とき：2023年8月13日(日)
開場 12:30 開演 13:00
ところ：熊本県立劇場 演劇ホール
入場料：1,000円
お問合せ：090-7992-3051(元村)



ユリコバレエスタジオ25周年記念発表会「ジゼル」全幕

2年に1度の発表会を興劇で開催している「ユリコバレエスタジオ」。発表会を開催しない年は、おさらい会(勉強会)を実施している。今年に設立30周年を記念して、国内外で活躍するプロや、海外留学組も参加する「30周年記念公演」が8月に予定されている

熊本県立西高等学校 太鼓部



3年生の2名は今年の6月で部活動を引退。1年生と2年生で新しい曲をつくりあげていく。

自分たちで考え、
行動することを重んじる
西高太鼓部の伝統

来年2024年で創立50周年を迎える熊本県立西高等学校。西高太鼓部は創部から30年以上の歴史があり、現在は1年生から3年生までの部員7名が在籍していますが、3年生の2名は6月に引退を控えています。

現在の西高太鼓部の「伝統」といわれるものを築きあげてきたのは、外部コーチである瀬戸コーチ。小学6年生の頃から太鼓をたたき、20代からは演奏家としてソロ活動している瀬戸さんは、太鼓部の演奏を見て、「ぜひとも指導したい!」と学校に直談判に行ったといいます。それが、2010年のことです。「太鼓という名前には、尊いものを励ます」という意味があります。演奏の技術というより、楽器への向き合い方や、自分たちで考え、行動できるような自主性を重んじた指導に取り組んでいます。「と瀬戸さん。西高太鼓部の伝統として、毎年、その時に在籍している生徒たちの顔ぶれを見て、オリジナルの曲をつくりあげています。今年も4月に1年生3人が入部し、現在作曲の真っ最中だといいます。

太鼓を通じて
世代を超えた
つながりの深さ

西高太鼓部の伝統のひとつとして、卒業生とのつながりの深さがあります。毎週末は太鼓部OBORGが部活動の指導。今年春には、卒業生の有志が集まり「音屋」という太鼓チームを結成。2012年にスタートした熊本城マラソンでは、コースの沿道近くにある西高太鼓部に熊本市から声がかかり、ランナーを応援する演奏を毎年行っています。コロナ禍あけて3年ぶりに開催された2023年の大会では、当時4名の部員のために、卒業生が30人ほど集まって、ランナーを盛り上げる演奏を交代で約5時間繰り広げたといいます。

3年生の部長佐藤由梨さんと副部長の森永倬由さんは、2021年の県の伝統芸能代表選考会で、ふたりだけで舞台上で演奏した経験をもっています。「その時部員がわずか2名で、太鼓部の伝統をつないでいくことがプレッシャーでしたが、自分たちの音楽で伝える、という貴重な経験だった」と森永さんは振り返ります。佐藤さんは、「これまで受け継いできた太鼓の基本、姿勢、一つひとつ大切にしたい」と後輩たちにエールを送ります。



佐藤さん(左)と森永さん(右)が1年生の時の選考会出場の際は、部員が2名。プレッシャーの中演じきったふたりを見て瀬戸コーチは感動したという。

県立劇場の所有楽器

ベーゼンドルファーの魅力

県立劇場では2022年8月から12月にかけてベーゼンドルファーのオーバーホール（部品単位まで分解して清掃・再組立てを行い、新品時の性能状態に戻す作業）を行いました。その後は3か月かけて3人の方にピアノの慣らし弾きをしていただきました。そのうちのお一人の長迫さんにベーゼンドルファーの魅力を伺いました。



長迫佳子[ながさこ よしこ]さん

今回大変幸せなことに、私の大好きなピアノスト、アンドラーシュ・シフが愛用しているこのピアノの慣らし弾きを、県劇でさせて頂く機会に恵まりました。ベーゼンドルファーピアノの魅力は「ウインナー・トーン」と呼ばれる、透明感と気品に溢れた柔らかい音色です。鍵盤楽器ながらまるで大きな弦楽器のように、ピアノ全体から深く豊かな音を響かせてくれます。一度聴くと虜になることと思います。姿も優雅で大変美しく、私はピアノの女王と呼んでいます。

県劇のホールは響きが大変素晴らしい、慣らし弾きの初日、ベーゼンの美しい音がホールの空気にふわあつと溶けていくような感覚を味わいました。鳥肌が立つほど感動したのを忘れられません。

ベーゼンドルファーインペリアルは製作に時間がかかるため、日本に作る機会はありませんが、そんな貴重で素晴らしいピアノが県劇にあるのです！重厚で美しい姿と、唯一無二の音色を、多くの方々に知って頂きますようにと強く願っております。

SPECIAL NEWS!

開館40周年記念ロゴマーク
「九州ADCアワード 2023」
ベスト9受賞

株式会社アド・スーパードレインプランナー
原田 雄太[おくだ ゆうた]

開館40周年記念事業の根幹をなすキービジュアルの1つが「ロゴマーク」でした。

ロゴマークの作成にあたっては株式会社ジャムさんに協力を依頼。熊本文化・芸術を40年間支えてきた劇場の歩みと、華やかなステージの輝く演者、それを支える劇場スタッフの皆様

の姿をデザインしていただきました。とお話をしました。また、デザインラフの時点ですべてオープンにし、周年ロゴの方向性を劇場スタッフの皆様と一緒に決めていく形をとりました。作成したロゴマークは、コンセプトムービー、名刺、動画企画（動く劇場く5 Stories）など、さまざまなシーンで使用することで周年事業に統一感を出すことができました。

1000点を超える応募作品の中から上位9作品に贈られるベスト9を受賞したこと



は、想いに賛同し、想いを形にしてください。クリエーターさん、そして、一緒になってロゴマークを作り上げた劇場スタッフの皆様全員の勝利だと思っています。

今回の40周年記念事業を通して、多くの皆様にとって熊本県立劇場が少しでも身近になってくれたら嬉しいですね。



県劇スタッフリレーコラム

事務局次長
宮家 郁子[みやけいこ]

モリス・ラヴェル作曲
「ボレロ」

数年前からジョギングを始めた。特段理由はないが、段差もないところで歩くようになったことか。事業グループに所属していた頃、公演がある日は1日で一万歩を超えることも多く、劇場内を10キロ近く走り回っていた。3年前に総務に異動し、断然デスクワークが増え、体力・筋力が明らかに低下しているため、運動不足解消となっている。学生の頃、長距離走は苦手だったものの、今は競争することもないので、気楽に走っている。

最初は3キロがやっとだったが、5キロ、7キロと徐々に延ばし10キロは走れるようになった。そして好きな音楽を聴きながら走ると足取りも軽い。



ある雨上がりの7月、気温も高くなく心地よい風が吹いていたので、熊本城まで走ることにした。半分ほどきたところでイヤフォンからラヴェルの「ボレロ」が流れてきた。この曲を知るきっかけはベジャール振付、シルヴィ・ギエムが踊る映像である。一切無駄のない肉体から発せられるパワーとオーラは、楽曲と一体化して心が震えた。残り3キロ弱、曲が終わるタイミングで二の丸公園に辿り着きそうだ。

冒頭のスネアドラムは、周りの車の音に消されて全く聴き取れない。それでも徐々にメロディーとリズムの勢いが増し、曲に呼応するように心拍数もあがってきた。

最後の坂を駆け上がったところで曲もクライマックスを迎えた。目の前に天守閣、そしてそこにはきれいな虹がかかっていた。こんなご褒美があるんだと感動し、暫くの間眺めていた。「ボレロ」はよく聴いているが、今ではギエムが踊る映像より、熊本城が脳裏に浮かぶようになった。

その曲を聞くと当時の映像や感情が甦る、という経験はよくあることだ。大好きだった曲に素敵な記憶が追加された。ジョギングは楽しい。熊本城マラソンも、東京マラソンも、ホノルルマラソンも、そう遠くない目標にできる気がしてきた。

寄稿

開館40周年記念事業「動く劇場」
(万田坑×DANCE)主演・振付・脚本
ダンサー・振付師
葉山 悠介



万田坑を訪れて感じたことは、人が人を感じる日常があったということだ。危険と隣り合わせの炭鉱仕事の無事を祈る石碑、職場の「ご苦労さん」の看板。世界遺産という圧倒的なロケーションで踊るだけでなく、万田坑で人々が生活していた時代に思いを馳せダンスを考えたいと思った。

作品では、焚き火をしていて偶然見つけたとも言われる石炭が日本の近代化に貢献したように、偶然や奇跡から始まり様々な出逢いによって発展する人の一生のようなイメージで物語を構成した。

女神と言われる山ノ神は、神々しくも包み込むような優しさと祈りが源となった力強さを。荒尾・玉名地域の小中学生ダンサーが踊る石炭の精霊たちの指先には、石炭が燃え上がるように熱く盛り上がる未来への希望や彼らの夢への情熱が込められている。炭鉱をイメージした音で構成される曲に、万田坑で生きてきた人々、今回の作品に携わってくれた人々の思いをのせ、カナリアが不死鳥となって舞い降りるようなイメージでラストシーンを踊った。

Dance is Timeless という言葉のように、時空を超えてたくさんの人の思いや日常が繋がってこの作品は完成した。時代や仕事が変わると誰かを思い懸命に生きるこの尊厳を世界遺産万田坑から教わった。この作品が多くなの人に届いて、それぞれの日常を誇りに思ってもらえたら嬉しい。そして日常をより豊かにする感動体験を次は劇場で味わってほしいと思う。



動く劇場～5 Stories～
万田坑×DANCE篇